

## 非自然主義的实在論は道徳の「行為指導性」を説明できるか

鴻 浩介(日本学術振興会特別研究員 PD/慶應義塾大学)

道徳は規範的である、と言われる。「事実と規範」のうちの後者にかかわるという意味では、これは自明に近い主張である。だが、より強い主張を意図してそう言われる場合もある。この強い意味での規範性を、「行為指導性」(action-guidingness)と言い換えよう。道徳に関する行為指導性の直観は多様な形で表現されてきた。曰く、道徳的事実なるものがあるとすればそれは「単なる一つの宇宙に関する事実」ではなく、我々の決断を「拘束」し(binding)、その「手綱を握る」(get a grip on)ものでなければならない。あるいは、道徳的思考とは認識的理性によって「何が成り立っているか」を発見する過程ではなく、実践的理性によって「何をなすか(what to do)」を決定する過程である、等々。

そして道徳の行為指導性は、しばしばメタ倫理における实在論、なかんずく非自然主義的实在論の根本的な欠陥を示すものと強く主張されてきた。非自然主義的实在論によれば、道徳的事実とはいかなる自然的事実にも還元不能な独特の事実であり、その正確な存在論的位置づけはともかく、因果的な力能を有さないという点は概ね合意されている。しかし道徳的事実がそのようなものであるならば、自然的宇宙の住人たる我々の決断を拘束し行為を導くことがどうして可能なのか。そのように言われる。

だが批判者らの確信とは対照的に、当の非自然主義的实在論者たちはしばしば、こうした批判が比較的容易に回避できると論じてきた。こうした論者らはまず、このような批判が「行為指導性」の多義性に基いている可能性を指摘する。すなわち、行為指導性を表すものとして使われてきた言語表現の殆どは、それ自体が記述的な読みと規範的な読みの双方を許すものである。たとえば決断が「拘束される」こととは、単になすべき行為が指定されることを指すとも理解できる。むしろ非自然主義的实在論者はその現象を説明することに特別な困難を持たない。

それゆえ批判が妥当であるとしたら、行為指導性の要請とはむしろ、道徳的判断や道徳的事実が我々の意思決定に対し、現に影響力を持つというテーゼとして読まれるべきである。このテーゼが一定のもっともらしさを有することは、たとえば次のように確認できる。限られたワクチンをどのように分配すべきかを我々が考え、議論しているとする。我々は何のためにそのような思考をするのだろうか。どのように分配するかを恣意的でない形で決断し、実際に動き出すためである、という回答はかなり有望に見える。つまり道徳的真理を突き止め、道徳的判断を下すことの一つの大きな眼目は、納得のいく形で意思決定を下すことにある。とすれば、道徳と我々の意思決定の間には何らかの体系的関係が——そうすべきだがそうはしていない、という状態がある程度体系的に排除される何らかの関係が——要求されるはずである。

この関係とは何であろうか。「道徳的事実とは、それを理由として行為することが可能なものでなければならない」という要請として理解するならば、非自然主義的实在論者もこれを受け入れることができる。「ある事実Fを理由として行為する」ためにFそのものの因果的関与は必要でなく、Fについての信念が因果的に関与していれば足りると考えることは十分可能だからである。そしてある事実が因果的力能を持たないことから、それについての信念が因果的力能を持たないことは全く帰結しない。たとえば「3

は奇数である」は数学的事実であり、因果的力能を持たないと想定できる。しかし、祝儀袋に入れる紙幣の枚数として偶数の2や4でなく奇数の3を選ぶ時、この数学的事実に関する我々の信念は意思決定に因果的に寄与したと考えることができる。

だがまさにこの例が示すように、上記の要請は極めて弱いものであり、道徳の行為指導性の具体化とはみなせない。およそいかなる事実であれ、我々の側が適切な動機を有してさえいれば、我々の行為の理由となり、意思決定を左右できるのである。逆に言えば、道徳が数学や他の無数の主題と異なった特別な行為指導性を持つとすれば、道徳の意思決定への影響力は、我々がたまたま有する動機に依存したものであってはならない。3が奇数であるという事実やそれについての判断と、祝儀袋に奇数の紙幣を入れるという習慣の間には全く偶然的な関係しかない。道徳判断や道徳的事実と、道徳的行為への動機の間により強い関係がない限り、道徳は行為指導的でないことになる。

この強い関係をテーゼの形にした場合にたどり着くと考えられるのが、いわゆる「判断内在主義」や「存在内在主義」のテーゼである。前者によれば道徳判断と動機の間、後者によれば道徳的事実と動機の間、何らかの体系的な関係が成り立つ。両者は大きく異なったテーゼであり、完全にモチベーションを共有するとは限らないが、行為指導性の直観が共通して背景にあると考えることは、ある程度理にかなっている。

すると非自然主義的实在論に提示すべき挑戦は、このような内在主義テーゼをいかに説明するかというものへ帰着することになる。もちろん、テーゼを説明せず単に棄却することはいつでも可能である。実際、判断内在主義や存在内在主義は様々な定式化されてきたが、そのつど批判者から反例の存在が主張されてきた。とはいえ、ある特定のテーゼを否定すること、その背後にある洞察自体を否定することは同一ではない。何をなすべきか考えることの眼目には何をするか決めることが含まれる、という行為指導性の直観をそもそも棄却したいならば、特定のテーゼへの反例の提示を超えた何らかの議論が期待されよう。他方もしこの直観自体に異を唱えないなら、正確な内容について未だ合意がないにしても、何らかの内在主義テーゼが成り立つはずだということには同意すべきである。

しかし後者の場合、やはり非自然主義的实在論者は容易でない説明の責任を負うように思われる。自然的宇宙から隔絶された道徳的事実やそれについての判断と、我々の動機との間に体系的な結びつきがあるとしたらそれは何故か。非自然主義的实在論者が道徳的事実について与える説明の乏しさを考慮すれば、この結びつきを偶然でない何かとして説明することができるのかは疑いある。そしてまた、この説明要求はヒューム主義のような行為の動機の本性に関する論争的前提に依存せず、強い内在主義テーゼにも依存しない形で定式化できる。必要なのは、我々の意思決定を駆動する動機なるものが何らかの心的状態であるということ、及びその心的状態と道徳的事実・判断との間に何らかの体系的関係があることという、比較的弱い想定だけである。それゆえ、これは非自然主義的实在論に対して対話的に有効な批判の一つになりうる。

しかし近年では、これに近い形で理解された説明課題を引き受けようとする非自然主義的实在論者も存在する。そこで本発表では、そうした議論の検討を通じて、非自然主義的实在論が道徳の行為指導性を説明することはどこまで可能であるのかを追求する。